

氏名（国内所属校）： 森下 理奈（尾道市立土堂小学校）
現地勤務先：カンボジア、バタンバン州小学校教員養成校

カンボジアの祭り と 日本の祭り

今回は、私のお気に入りのカンボジアの行事を2つ紹介します。

カンボジアの正月・・・4月13日、14日、15日



玄関に飾るお供え物
（果物、カンボジアのお菓子、
ジュース、缶詰、花など。）



お寺に料理を持っていきます

* お寺へ行きます

正装をして行き、まず仏様の前で線香を立て、お花を添えてお祈りをします。その後、持ってきた料理を寄進します。ご飯の他、決まった料理を作るので、それぞれの家庭から寄せられたおかずを一緒に混ぜても、問題ないようです。

他に、線香、お茶、砂糖、練乳、菓子、たばこ、お金等のセットも寄進します。

* 水かけ遊びをします

小さいビニル袋に水を入れて輪ゴムでとめたものを、道行く人に投げつける遊び(?)です。子どもや若者が中心で、年配の人や、当てても喜んでくれそうにない人には投げません。誰なら当てても良いかは、不思議と一目でわかります！

私もトゥクトゥクという乗り物に乗って友だちと街へでかけました。水袋（ただの水）をちゃっかり売っている人もいるので、私たちはそれを買い、道ばたの人や、バイクやトラックに乗った人たちに投げて応戦しました。

当たると快感ですが、当てられると意外と痛く、服はびしょぬれ。しかも、ぬれた後にベビーパウダーをかけられるので、全身ぐちゃぐちゃになります。でも、見知らぬ人同士が1年に一度、水を掛け合って心の底から大笑いできるのは、楽しいと思いませんか？

しかし、これによってバイクの横転など事故が多発するわ、道端はビニル袋だらけになるのわで、警察は禁止しているようです。（パトカーが来るとみんな一斉に家の中へ走って逃げます！）

でも、20歳前後の若者3人組がバイクを田んぼの畔に止めて、水たまりの水でちまちまと水袋を作る姿や、子どもたちが水袋を片手に、いらすらし顔で、バイクが来るのうずうずした様子で待っている姿を見ると、やっぱり、ずっと続いてほしいな、と思いました。



桶やホースを使うことも...



ねらいを定めて・・・！



カンボジアの水祭り・・・11月（ボートレース地区予選は10月）



スタートの合図を待つ数秒の緊張感。漕ぎ手の眼が光り、心が一つになる、私の一番好きな瞬間。



がんばれ～！
抜かせ！もう
ちょっとだ！

* ボートレース地区予選

毎年11月に首都プノンペンで開催される水祭りの最大の見せ場は、何と言ってもボートレース。各地区の予選を勝ち抜いたチームが結集して、カンボジア 1 を決定します。

私の住んでいるバットバン州でも、2日間にわたって盛大な予選が行われます。町は1週間ほど前から、そわそわした雰囲気になります。公園の芝はきれいに刈られ、安全対策のためか歩道の段差や、街路樹の下方1メートルは全て白いペンキで塗られます。お祭り気分一色です。

当日。離れた農村に住んでいる人は、トラックの荷台にぎゅうぎゅう詰めになって乗ってきます。長旅の疲れも感じさせない笑顔で、みんな興奮気味です。町には大音量で音楽が流れ、川沿いには屋台がずらっと並び、子どもからお年寄りまで多くの人であふれかえります。

レースは、2チームずつ対戦の勝ち抜き戦で、約800メートルの直線を競います。

* 祭りの前日

ある団体の前日の儀式？を見せてもらいました。翌日のレースで使う舟はきれいに模様が描かれ、舟の前には、鶏肉や果物などたくさんのお供え物が並べられていました。水夫（かこ・漕ぎ手）が座る所には、ろうそくを立て、必勝祈願です。飲んだり食べたりして志気を高めるのは日本と一緒にですが、さすがカンボジア、それに加えて伝統楽器を演奏しながら、歌と踊りが始まりました！



後日、プノンペンでの決勝戦に行く直前の代表チームに会いました。バットバンの象徴である大きな像の前で線香を立てて必勝祈願（ここでも伝統楽器にあわせて歌と踊りが...）。トラクターの後ろに荷台をつけたような簡単な台車にレース用の舟を乗せ運びます。1週間ほど滞在するための食料、鍋、ござ、服等の荷物と、漕ぎ手を乗せて大所帯で出発です。目的地プノンペンまでは15時間ほどかかるそうです....

「貧しいというなら、祭りにかかる膨大な経費を道路や橋の整備に当てたら...」という考えもあるかもしれませんが、私は祭りというのは、経済や効率といった価値観では計れない、人間の文化としての気高い価値があると思っています。

私の故郷、^{おおさきかみじまちょう}大崎上島町（^{ひがしの}東野）では、今年も夏祭り = ^{かいでんま}權伝馬競漕の季節がやってきました。

“地域で育つ”とはどういうことか、“郷土を愛する”とは、“文化の継承”とはどういうことか、を教えてくれた故郷の祭り“權伝馬”が、私は大好きです。太鼓の音を聞くだけで血が騒ぎます。

祭りがその人の原点をつくり、人と人をつなげ、人や地域を元気にさせるものであることは、日本もカンボジアも同じ。窮屈になってしまった世の中で、“元気がでる”“楽しい”という価値観がもっと高い価値を認められたら、もう少しのびやかな社会になると思うのですが、いかがでしょうか？